

現代社会における都市景観と住民

——谷中・三崎坂^{さんさきざか}を事例として

竹 中 宏 子

はじめに

戦後の日本における社会変動の一側面として、産業化、人口の都市集中、そしてそれに伴う都市的生活とその農村社会への浸透の過程である都市化が挙げられる。特に大都市東京では国の中枢機関の一極集中に伴い、内部地区（インナーエリア）においては、昼間と夜間の人口差が激しいことからわかる通り、定住人口の郊外への流出、地域住民の高齢化、コミュニティの弱体化、そして住宅や都市施設の老朽化や、土地利用の不計画性による居住環境の悪化などのインナーシティ問題を抱えている。本稿では、台東区谷中地区¹（以下、谷中）を例にとり、このような現状に柔軟に取り組んだ住民の行動の考察を試みる。

谷中が属する台東区は、昭和35年をピークに人口減少の一途をたどる²など、インナーシティ的状況が著しい地域と報告されている³（グラフ1）。商業地域が約7割を占める台東区⁴の中で、谷中は住宅と寺院が多い地区である。近年では、「寺院が多く江戸的情緒を残す町並み」として東京の観光スポットの一つに数えられている。当地区内の上野桜木では、この町並みを基盤とした景観が壊されるとして、或る高層マンション建設計画が浮上した際に反対運動が始まった。建設工事が始められた現在でも、この運動は続いている。現時点ではそのマンションの約8割の区画が既に売却済み⁵で、工事の中止を迫るには非常に困難な状況にある。

谷中では過去にも同様に高層マンション建設の話があった。三崎坂のラ

イオンズマンションである。この場合、建設者側と住民との幾度にもわたる協議の結果、住民の「町の景観を損なわない谷中らしい建物に変更する」要求に建設者も歩み寄りを見せ、原案では9階建てに予定されていた建物の高度を6階（一部4階）にまで下げることができた。両件とも住民の要求は同様で、建設自体に反対するのではなく、周囲の景観に配慮した建物への変更を迫る内容のものである。調査を進める中でみとめられた両件の相違点は、高層マンション建設問題が浮上する以前に、景観を守るための様々な住民の活動があったか否かである。そしてそこでは、ある特定の人物が、景観を保護するアイディアを出し、実現させてきた経緯がみとめられた。エスニシティ研究では、エスニックグループとして集団化する、もしくはエスニック運動に発展する際のリーダーを原初的関心または利害関心の高低により類型化を行ったものがある。この類型を通して、問題となる運動、あるいは当該集団自体の基本的性格を捉えることができると論じている⁶。また、非日常、つまり祭礼のコンテキストでは、特定の人物の発案で祭りが大きく変化した事例⁷、そして個人の想いが後に全国に流布する祭りを作り上げる例が報告されている⁸。以前に筆者も、特定人物が、新しい祭祀集団を結成する一つの要因になったことを論じたことがある⁹。そこで本稿では、第一に、「発案者ーリーダー」の行動に焦点を据えながら、三崎坂における一連の景観保護活動の経緯を明らかにする。ここから、インナーシティ問題を抱えながらも外部資本が侵入してくる地域の住民が、景観破壊を危機と意識しその保護活動を実践するに至る場合に、「発案者ーリーダー」の存在の有無が鍵となることがわかるであろう。

「発案者ーリーダー」の行動を追っていくと、彼が観光客の存在も積極的に意識していることがみとめられた。アーリによれば、観光客が求めるもの、つまり、「観光のまなざし」が向けられるのは、日常生活で習慣的に出会うものとは区別されるような何らかの様相がある場所であり、観光

は、日常と非日常との基底的二項対立から生じるものである¹⁰。観光客は、自分自身の経験の中には存在しない他者の現実生活の中に、大いに魅力を感じるというのである。このような、当該社会の人々にとって「あたり前」の生活や慣習が、観光という文脈に乗ることにより他者から評価を受け、その結果、自己評価にもつながることは既に論じられている¹¹。また、他者から向けられる視線の影響力を、都市祭礼における見物人や観光客と担い手・演者との相互関係を論じた都市祭礼研究も存在する¹²。

そこで第二に、谷中・三崎坂での一連の景観保護活動における「発案者―リーダー」が意識する「観光のまなざし」を考察する。「発案者―リーダー」の言動や行動、およびそこから読み取れる彼の理念から、谷中における「観光のまなざし」のあり方を捉え、本地区の住民の生活との関係を検討する。ここから、経済効果のみを目的とせず、生活者主体の生存の戦略としての「観光」が明らかになるであろう。

1. 谷中および三崎坂

まず、谷中および三崎坂が位置する三崎町の歴史・地理的背景と現状について簡単に述べる。

谷中は、上野台地の最北端に位置し、その南側は上野公園および上野地区と接している。また、東は根岸、西は文京区の千駄木と根津に、そして北は諏訪神社のある諏訪台（現在の荒川区の西日暮里付近）にそれぞれ隣接している（地図1）。

谷中は、定説として、上野台地と駒込との谷間に位置し、且つ、「下谷」に対置して名づけられたと言われている¹³。しかし、現在「谷中」と通称される土地の大半は、上野台にある。従って、一般的には、谷中の発祥地は谷間であるが、そこに隣接していた高台の方まで「谷中」と呼ぶようになったと説明される¹⁴。一方、現在の谷中2丁目から5丁目にわたる「三

崎」町の由来は、「駒込、田端、谷中の3つの丘が鼎立するところであった」ことから名づけられたとか、「不忍池を遡れる根津溪の上流に臨んだみさき崎であった」からだと考えられている¹⁵。

谷中は、古くは天正18（1596）年頃から、感応寺古前町、惣持院門前などの門前町として町が形成されていった。特に明暦の大火により焼け出された寺院が、谷中の地に移転してきたのを機に、門前町として拡張していった。寺院の移入とともに、溝口信濃守、松平飛騨守の下屋敷やその他の武家屋敷も建てられた。このように三崎町は、その寺院群と屋敷群の間に位置していたので、町屋として発展していった。

明治4（1871）年には、三崎坂を境として南側と北側の二町に分けられたが、同6（1873）年になると双方を合わせ、さらに同24（1891）年には初音町3丁目の一部を合併して、現在の町会区分に見られる三崎町の町域になった（地図2）。現在のような住居表示になったのは、昭和42（1967）年のことである。こうして前述の通り、三崎町は、谷中2丁目から5丁目にわたる地域となったのである。

谷中の町並みは、「寺町」の他に、「江戸的情緒を残す町並み」のように表現されることが多い。これは、谷中が関東大震災と第二次世界大戦の東京大空襲という二度の大災害による破壊を逃れて、古い民家が残ったからである。

三崎坂は、三崎町を南北に割るようにその中心部を横断している。道幅は、10mほどである。この坂を下ると不忍通に出、通りを渡ると団子坂が始まる。現在、三崎坂に面して立ち並ぶのは、主に寺院、店舗、住宅である（地図3）。この坂道は、都市計画上、谷中の大半が住居地域であるのに対し、近隣商業地域¹⁶に定められている。つまり、建設可能な建物に対しては、高さの制限はないのだ。昭和50（1975）年代中頃から始まった地価高騰により、いわゆる地上げによる乱開発が不忍通でも行われ、この

通りにも短期間で一気に高層ビルが林立するようになった。「20年前ぐらいだったか、不忍通にあれよあれよという間にビルが建っちゃって、それがこっち（三崎坂）まで来ちゃうんじゃないかあねえかって危機感があったね」と三崎町の住民らが語るように、この頃から三崎坂に景観保護への動きが見え始めたのである。

2. ライオンズマンション¹⁷建設問題

平成10(1998)年9月、谷中三崎坂にライオンズマンションの建設計画が明るみに出ると、三崎町の住民は、「地上げの波が、とうとうここまで来たか」と思ったそうだ。このままでは、三崎坂も不忍通のようにビルが林立するのも時間の問題であり、それは谷中全体に広がるだろうと危惧したとも言える。当初、高さ27.38mの9階建て、戸数49に予定されていたマンションは、それまでどんなに高くても中層の建物¹⁸しか見られなかった三崎坂では、異常に高く、外観も至って近代的な建物だった。この建物によって、寺院を中心とした景観は壊され、坂の上からも下からも見る事ができ、高さから外観に至るまで連続性のある眺めを失うことは確実だった。

そこで、近隣住民、谷中の各町会、下谷仏教会、谷中の町のプランニングを考える「谷中学校」¹⁹、地域のミニコミ誌（『谷根千』²⁰）を発行する谷根千工房などから成る「谷中の町を考える会」が、マンション計画地における解体工事開始の約1ヵ月後に発足した。この会を住民側の母体として、様々な話し合いや運動が展開された。そして「谷中の町を考える会」発足から約2ヶ月の間に3回にわたる建設者側と会合を重ね、その結果、建設者側も、建築計画の確認申請を取り下げ、計画の見直しに合意するに至った（表1）。

その後の検討会議で建設計画は、8階建て（一部4階）の第2案を経て、

結局、6階建て（一部4階）で戸数43のマンションとすることになった。その過程で、三崎坂に面する、あるいはこの坂に隣接する土地所有者の間で「三崎坂建築協定」も締結され、この協定において当坂には建築物の形態と高さの制限が設けられた²¹。ライオンズマンションの決定案も当協定に準じた建物となったのである。

しかし、「谷中の町を考える会」が提案したのは、ライオンズマンションが「地域に受け入れられ、谷中にあった建物」²²に変更されることだけではなかった。分譲マンションであることから、入居者はそこへの定住を予定している。三崎町の住民は、地域に溶け込んで、活動を共にしてくれる人々の入居を望んでいた。そこで、建設者側が作成する入居者募集の広告に関しても、次のように数回の変更を迫った。

初めに建設者側が出した見出しは、「谷中の町の景観を私たちが守りました」というもので、その後に少し小さな文字で「今こそ、この町に住む私たちが立ち上がらねば！寺町谷中にあった計画を大京に提議し、対話を重ねて生まれたマンションです」と書かれていた。この見出しは、一見、建設者が谷中の景観を守ったように思われるという理由で、変更を求められたのである。

次いで「谷中の町を愛する人たちの知恵から生まれました」という見出しとなり、それに「上り坂、下り坂、どちらも同じ坂道でした」というフレーズが続いた。当案までは、地域住民代表と建設者との交渉経過がNHKの番組で取り上げられたことを、宣伝ポイントの一つとして載せていた。

最終的に採用された見出しは、「谷中の町を愛する人たちの知恵に学びました」で、「上り坂、下り坂、どちらも同じ坂道でした」というフレーズが続くものである。NHKで取り上げられた詳細は削除され、代わりに谷中地区町会連合会会長と谷中三崎坂会長の連名による、次の言葉が載せられた。

寺町の家並みがとぎれてしまうのは残念だが、当初の対立から協議することができ、谷中にあったマンションに近づくことができたことは、一つの成果と考えている。今後は入居される方にも、谷中の人情を伝え、谷中の一員として住んでいただきたい。

こうして、住民と建設者側の直接対話によりつくられた「画期的なマンション」という成果を、建設者側の成果として一方的に奪われることなく、三崎町の新住民を募るに至ったのである。

入居は平成12(2000)年11月から開始され、平成13(2001)年春には完了した。入居者の大半は、谷中やその周辺地域からの移転者である。三崎町には「全く何も知らない人より、町の状況を知っていて入ってきてくれる人の方がいいわ。後は実際に一緒にやってくれるかどうかだけれど」という意見が少なくない。平成13年の諏訪神社の祭りで、三崎町の御輿はライオンズマンションにも立ち寄り、新住人を歓迎する様子が見られた。ライオンズマンション住人も、三崎町内で行われる祭りや催し物などの際には、旧住人に混じって積極的に参加し、裏方の仕事で協力している。彼らの中には、「町会の活動に参加したり、近所づきあいをすることを前提としてこのマンションに入った」と明言し、実行する者もいる。また、「谷中の町を考える会」では、新旧住民による真の町づくりはこれから始まるという認識をもっており、入居後のアンケート調査の実施など、追跡調査も行っている。

3. 三崎坂における景観保護活動

ライオンズマンション建設問題に関して調査を進めるうちに、筆者は、一人の人物（A氏とする）の存在に気づいた。A氏は、三崎坂に飲食店を構える自営業者である。最近では主な仕事は従業員に任せ、店に立つことはほとんどない。地方出身者で、東京の他地域での下積みを経てから、自

分の店を構えるために、昭和50（1975）年頃谷中へ入域した。彼は、10年ほど前から谷中三崎町会長を務めており、また、「谷中さんさき坂商店街振興組合」発足当時の理事長でもある。

ライオンズマンション建設問題の場合、先導的役割を担ったのは、A氏ばかりではなかった。特に、谷中学校が、詳細にわたる要望書作成やマンションの模型を作って景観問題の所在を明らかにして建設業者を説得したこと、そして地域のミニコミ誌である『谷根千』が、メディアとして地域を越えて訴えかけたことなどが、問題解決の大きな原動力だった。しかし、例えば、マンション建設の話が浮上した際に、近隣の寺の住職が最初に相談を持ちかけたのはA氏であったし、谷中学校に要望書作成を依頼したのもA氏だった。一般住人はもちろんのこと、関係者と話をしている、必ずといっていいほどA氏の名前が登場する。そして、「そのことは、A氏なら知っている」「私よりA氏に尋ねた方がいい」と言う人も多い。A氏自身も、「こっちは好き勝手にアイデアをだすんだが、それをきちんと模型なんかをつくってくれるのが、谷中学校の連中なんだよな」と、自身の発案とその実現のための協力者の存在を認める発言をする。

本稿の冒頭で述べたように、三崎坂においては、ライオンズマンションの問題以前に景観保護の活動があった。それらは全て、A氏が発案したものだった。本節では、この活動内容を明らかにする。

（1）祭りによる町の活性化 ―景観保護の前段階―

三崎坂では、景観保護として建物に関する諸規制の運動に着手する以前に、商店街を中心とする町興しの試みがあった。最初の活動は、昭和56(1981)年頃に当時の区長の呼びかけで始まった「江戸のある町会」の結成であった。当会は、「谷中の良さを知り、勉強すること」を目的とし、古老から話を聞く形で始められた。その後、聞き取りから明治あるいは大

正時代の地図を作成したり、現状の谷中の様子をビデオに収めて後世に残そうといった活動に発展した。活動が進むうちに「今のうちに何か行動を起こさないと、谷中が無くなってしまう。地図に見られる昔の商店や家屋などわからなくなってしまう」という危機感がつのっていったという。A氏は町の伝統や地域性に関係がある祭りが欲しいと思った。そこで、かつて、三崎坂とは不忍通を挟んでつながる団子坂に菊人形があり、現在の区政区域とは関係がない「谷中」としての祭りが行われていたことから、「谷中菊祭り」を発想した。

この案を実現するため、まず、菊祭り実行委員会が発足される。A氏によれば、複数の町会や他の団体から成る実行委員会ではなくては、行政側から協力や援助を受けるのは難しい。当時三崎町会長ではなかったA氏は、坂に面する全ての町会に菊祭りへの協力を要請した。このように、地域住民を取り込むと共に、行政側と手を結ぶための手段として、実行委員会は発足されたのである。

祭り運営の資金調達には、「谷中さんさき坂商店街振興組合」の発足が関係している。A氏は、当組合発足当時から理事長である。三崎坂には既に、「谷中さんさき坂商店会」が存在していたが、当会は、昭和58(1983)年に現在のような商店街振興組合へと改組される²³。組合になると法人格を与えられるので、それなりの事務手続きで仕事が増えることになるが、何らかの活動を起こすときには組合側から助成金を与えられるというメリットもある。A氏は、後者の利益を目論んだのである。この助成金と、実行委員会を構成する他の組織の協力を基に、昭和59(1984)年に「谷中菊祭り」²⁴が大円寺で始められたのである。

同年、地域のミニコミ誌である『谷根千』が創刊される。発行元である「谷根千工房」は、「谷中菊祭り実行委員会」のメンバーでもある。A氏によれば、谷中に興味を持ち、当地についての書物を出版したいと考えてい

た谷根千工房の中心人物が、A氏の元を訪れたところを勧誘したそうである。更にA氏は、菊祭りについての冊子を発行するよう提案する。こうして『谷根千』の創刊号では「谷中菊祭り」が特集として取り上げられ、それに因んだ記事（「団子坂の菊人形」、「大門寺と瘡守稻荷」、「三崎坂」など）が掲載された²⁵。

翌、昭和60(1985)年には、A氏の呼びかけの下、三遊亭圓朝の墓がある全生庵で「圓朝祭り」²⁶が開催される。これは、江戸から明治にかけて人気の高かった怪談噺の名人、三遊亭圓朝を偲ぶもので、8月11日には落語の寄席が行われる。そこでは、圓朝の怪談噺に因んで全生庵が保有する幽霊画も公開される。これにはエピソードがある。第一回「谷中菊祭り」の後、A氏は、全生庵で幽霊画の虫干しに出くわす。彼は住職に、虫干しを一ヶ月間公開して欲しいと要望する。返事を渋る住職に、「谷中が有名になると、人が来てくれる。人が来てくれるって事は、谷中を守るって事なんだ」と何度も訴え、ようやく受け入れられたのだ。ここからA氏の、外に向けて谷中を発信するばかりではなく、地元住民に対してもその価値に気づくよう触発している様子が窺えるのである。

(2) 谷中小学校の改築および学校前ポケットパークの建設

昭和63(1988)年、老朽化した谷中小学校が改築されることになった。設計は同年の7月に始まっていたが、台東区から住民への説明があったのは、11月頃になってからであった。

当初、台東区は、小学校および学校前公園（ポケットパーク）の大よその構想しかもっていなかった。そこでA氏は、区長に「住民に開かれた感じの学校と公園をつくりたい」と要望し、住民参加の話し合いの場として「谷中小前公園を考える会」を立ち上げた。そこには谷中学校も参加しており、専門家の立場から要望書作成の協力を行った。

翌平成元(1989)年3月までに、区の出張所や自宅の2階で、「谷中小前公園を考える会」のメンバーと、区の施設課、あるいは教育委員会との話し合いが何度も繰り返され、「谷中という寺町に合った学校」、「町の人と学校関係者との交流の場になるような公園」²⁷というコンセプトで設計案が練られた。更に、「何かシンボルを置きたい」想いから、谷中の大名時計に因んで、同様の時計を設置することを要望した。大名時計だけでも一千万円以上を要した。当時は、バブル景気の只中だったので、設置がなんとか可能となったと関係者は語る。

最終的に谷中小学校は、城のような白壁に瓦屋根の建物に新改築された。先に述べたように、ポケットパークには谷中のシンボルである大名時計が設置されている。「谷中に合った建物」というだけではなく、結果的に一種の観光スポットとも思われる場になったのである。

(3) 初音交番の建設

初四町^{はつしちょう}²⁸内（谷中3丁目7番地）に、明治42(1909)年から、昭和19(1944)年および同42(1967)年の改築を経て、初音派出所があった。当派出所が、平成4(1992)年頃に三崎坂に移転してくる話が浮上する。A氏は早速「三崎坂派出所を考える会」を発足させ、谷中学校にも依頼して参加してもらう。谷中小学校の場合と同様、「谷中に相応しい建物」をコンセプトに図面が描かれる。瓦屋根葺きで、建物の前面には木を植え、建物自体は威圧感を与えないように道路からなるべく引っ込んで建てる案を下谷警察署に提出した。その際A氏は、「あんまりきちんとしたのを出したら具合が悪い。素人が描いたようにして出したほうがいい」と、手書きで図面を描くよう勧める。権威主義的な空気が漂う警察を相手に、「建築に関して素人の住民が、一所懸命お願いする姿」を印象付けるという戦略なのだ。

警察側も、襲撃や火災に対する配慮から交番の建築には構造や素材の面で規制が多いため²⁹、考える会からの提案は、なかなか受け入れられなかった。そこで、当時の署長らに谷中を歩いてもらうよう懇願する。実際に町を見てもらい、図面を再検討してもらうことが目的だった。この願いは受け入れられ、署長他数人が住民の要望に応えるべく谷中を訪れ、技術的に受け入れ可能な最低の線で、瓦屋根葺き仕様と入り口を道路から引っ込めることに同意するに至った。

警視庁の署長は、1、2年で転属になる。部下でも、長くて5年で勤務地を変ってしまうという。このようないわゆる役人と、定住している住民との対話が一番難しいとA氏は語る。その中で、当時の下谷警察署長が住民の要望を快く受け入れたことを、A氏は高く評価している。現在、下谷警察署内でこのエピソードを知る者はいない。

(4) 公衆トイレの設置

A氏は、何年も「谷中菊祭り」を開催するうちに、公衆トイレがない不便さを経験する。祭り執行にあたり、寺側から簡易トイレを設置することを条件に境内の使用を許可されていることから、毎年、トイレの設置だけでも数十万円の費用を要していた。この出費を回避する目的から、谷中小学校前に公衆トイレをつくる要望を区政懇談会に提案した。ただし、A氏の語りでは、第一に三崎坂は、盆や彼岸に車の往来が激しく、それだけ人が集まるにもかかわらず、坂上まで公衆トイレがなく、第二に、菊祭りを初め様々な祭りが行われているため公衆トイレが必要だという順序で説明される。

通常、公衆トイレの設置には、住民の反対が付き物だという。A氏によると、区役所側では周辺住民の反対多数を予想して、「住民の賛成をとれば応じる」と高をくくっていたようだ。ところがA氏が賛成を表明する

署名を獲得してくると、「何だ、Aさんが言ってたのか。これは引っかけだったな。Aさんにかかったら、すぐに判子押しちゃうよ」と応えたそうだ。ここからも、A氏が区役所でも知られた町づくりに関する諸活動のリーダー的存在で、住民からかなりの信頼を得ていることが理解できるだろう。

こうして平成10(1998)年、谷中小学校の建物の一部として入り口の脇に置かれていたコミュニティ委員会のごみ置き場が、特別な場合に使用可能な公衆トイレとして新設された³⁰。

本節で見てきたA氏の行動は、彼の地域におけるリーダーとしての特質の形成過程でもある。小浜は、占領下の谷中地区における町内会の再編過程の研究を通して、戦前・戦時における居住年数の長い地域の有力者（来住二世代目を含む谷中生まれの地付層と来住者層）に替わり、賃労働者から自営業主層へと上り詰めた来住者が町内のリーダーとして現れる過程を述べている³¹。A氏の場合は、来住時から自営業者であったので、小浜の指摘とは多少状況を異にするが、定住することで町内において経済・社会的な基盤を確立したことは確かである。彼が三崎町会長に選ばれたのは、一連の活動期間の途中においてである。本節を通して、時の経過とともにA氏の存在感が強まり、住民からの信用を獲得するに至る過程が見られた。

A氏のアイディアから始まった一貫した町の活性化や景観保護の運動は、住民の生活に対する意識を高め、地域住民としての結束の基盤を形成する結果に至った。この下地があったからこそ、ライオンズマンション建設問題が起こっても、既存のネットワークを使って問題解決にいち早く取り組めたのだと考えられる。これら一連の活動には、自営業者であるA氏の商店街を興そうという目的が全く含まれていなかったとは断定できない。しかし彼は、当地域の住民でもあり、町会長でもある。「若いうちはどこへでも行かれていいが、年取ったら町や近所しかなくなるんだ。だか

ら、町のことを考えなくっちゃ」と、彼は語る。経済面のみにとらわれない地域への関わりの意図が、この言葉から読み取れる。

4. 「観光のまなざし」の取り込み

第2、3節で見てきた三崎坂における一連の活動について、A氏は、「町・町の者のために」あるいは「町・町の者のことを考えて」という表現をよく使う。これに加えて「『谷中はいいな』と思わせる。見に来た人の目を借りて、町の保存に繋げるんだな」とも語る。つまり、地域やその住民を考える内向きの志向性と同時に、観光客を対象に、外に見せる行為も視野に入れていることになる。実際に、台東区が発行する「景観資源マップ」にも「特徴ある界限、みちすじ」として、三崎坂がマークされている。先に挙げたA氏の言葉を手がかりに、本節では、谷中における「観光のまなざし」を考察してみたい。

筆者が調査に行くと、平日でもカメラや地図を片手にした多くの観光客に出会う。彼らの話に耳を傾けると、昔ながらの商店に入ったり、谷中の町並みを眺めながら「懐かしいね」「何か落ち着く」という感想がきかれる。印刷物の中で表現されている谷中には、例えば次のようなものがある。

「寺と坂のあるまち、静かなたたずまいに先覚者たちの足音が偲ばれる」³²

「一步、谷中の街に足を踏み込んだときに、これ程まで静かに、江戸の町並みとたたずまいが残されていることに、心動かされると思います。」³³

「谷中地区には、古い民家とともに、寺院も多い。東京の中心部でありながら閑静で、独特な雰囲気がある。町並みには江戸的な情緒も感じられる。」³⁴

「ホッとするまち、谷中」³⁵

「緑と空と粋の町。江戸の風情がなつかしい、三崎坂中あたり」³⁶

これらを要約すると、谷中は、「寺町」としてのみではなく、「歴史性をもった町並みと、静かな生活が約束された町」である。この表象は、地域の「内」と「外」の双方から規定されている。当該住民自身が、生活居住空間を静かな生活が約束された場と認識することには、さほど問題はないだろう。しかし、「静かな生活」は、外部者に対して観光地となり得るのであるか。そこで筆者は、この「静かな生活」という点に着目したい。

アーリによれば、「観光のまなざし」が向けられるのは、日常とは質を異にした場所であった。この見解を踏まえて、浜は、科学万博をピークとして下降していった「筑波山のがま」の観光性の要因の一つを、次のように述べている。

新幹線網や高速道路網が整備されたことによって、観光圏が大幅に拡大したことが挙げられる。単純に言って筑波山のライバルが増えたのである。そして、単に増えただけではなく、新たに視野に入ってきた観光地の方が観光客にとっては目新しい、すなわちより非日常的なのである。観光のまなざしは日常から非日常に向けられるものであった。観光のまなざしが成立するための条件である日常と非日常の落差が、筑波山の場合、相対的に低下してきたのである。筑波山は、次第に日常の山になってきたのである³⁷。

「観光のまなざし」が非日常性を指向しているのなら、谷中における「静かな生活」は、観光客にとっての非日常であり、同時に当該地の人々にとっての日常なのである。本来、人間の日常にあるべき「静かな生活」がある場が観光地になるほど、現在多くの人々にとって日常が非日常化していると考えられる。このような自己の「日常」と他者の「日常」が差異化されるからこそ、そこに「観光のまなざし」が生まれるのである。谷中では守り抜かれた景観が、日々の生活を営む住民の姿に独特の魅力を与え、外

部者を惹きつける。このような「日常」の差異化を通して、谷中は、他者にとっての「非日常」となり得るのである。

このことは同時に部外者から生活の営みを覗き込まれていることになる。好むと好まざるとに関わらず、観光地の宿命としてこのような状態を受け入れなければならない。谷中の場合も、「生活を覗き込む」観光客を不愉快に感じている人々も少なくないと聞いている。これは通常許されることではないので、多くの場合、観光業者の手によって観光スペースが作られ、生活の舞台裏への侵入から自己防衛をする結果にもつながる³⁸。

しかし谷中の場合、日常生活と生活環境そのものが「観光のまなざし」に曝されるという負の側面を伴うことを承知しながらも、来訪者を拒んだりはしていなかった。むしろ、外部者から受ける評価を有効に利用している。つまり、A氏は「外」からの評価を通して、地元住民たちに自らの生活環境の再評価を促すことを狙っていたのである。それは、これまで見てきた諸活動をA氏が始める際に、「人に来てもらって谷中の良さを知ってもらう。そうすることによって、町の保存につなげるんだ」というコンセプトを訴えてきたことから読み取れる。自らが自身を褒めるより、他者から評価を受けるほうが効果的なのだ。

また、冒頭で指摘した通り、谷中は基本的に住宅地だ。この事実からも、谷中における「観光のまなざし」が、昔から続く、あるいは現状の生活や環境の維持を通して、あくまでそこで生活する住民のために利用されるべきものであり、この点において重要性を帯びるのである。

そして更に、「高層ビルを建てさせない」というような住民の生活に直接関わる問題への取り組みが、景観資源を保護し、観光地としての評価に繋がる。来訪者を受け入れながらも「観光スペース」化してしまわないことが、「まがい物」ではない「本物」の評価を更に高めているのだ。

ところで、A氏も地方からの来住者である。外見や話し方からは、地元

出身者といっても疑われないだろう。しかし実際は、外から来て、谷中に住み続け、この地を高く評価し、そのよさを守ろうと活動している人物である。観光という文脈のみではなく、外からの目を取り入れることが、町の再評価や活性化につながることを身をもって経験している人物であるとも言える。だからこそ、外部者の意見も聞き、誰でも受け入れる心構えができていたのであろう。谷中には、様々な分野から多くの研究者や学生が調査に入ってくるが、これをA氏は、「そういう人たちと話をしたり、書いたものを読むと、『ああ、そうか』と勉強になるんだよ」と評価する。

この外部者の地域への取り込みを、A氏の他に、意識的に見つめる人もいる。次の言葉は、ある公共施設職員から筆者に向けられたものである。

「学生さんが来たり、あなたのような人が来ることによって、町会の人たちも活性化されてるんだよ。話の種にしながらね。そうでなければ、町会は、どんなに若くたって40代の人たちばかりの集まりだよ。いつも同じメンバーで、同じことの繰り返しでは、空気も澱んで、今みたいな活気はないだろうね。」

おわりに

従来、本稿で取り上げたような景観保護の活動についての研究では、保護する側の住民と破壊する企業との両者の対立に焦点が当てられ、「住民」が一まとめに扱われてきた感がある。何か新しい、あるいは画期的なことが起こる陰には、特定の発案者の存在がみとめられる場合が多い。また、同じような状況にあり、同様の気持ちを抱いていても、それが集団内で意識化されるには、意識化を促すリーダーの存在が不可欠であると筆者は考える。

エスニシティ論では、経済的に劣位に立ち、かつ文化的にも隷属的な地域であるというだけでは、エスニシティが顕在化し、政治動因が生じる説

明には不十分だという見解がある。「構造的差別を、受忍限度を超えた『不満』として集団ないし地域の成員に認識させ、運動を組織化する担い手（リーダー）が、エスニック・モビライゼーションには不可欠」³⁹であるというのである。この概念に従って、本論で見てきたような地域住民の生活環境への再認識および再評価を考えてみたい。

インナーシティ問題を抱え、且つ、外部資本が侵入してくる地域では、景観や地域の伝統の崩壊に対して住民が多かれ少なかれ何らかの感情を抱くであろうが、集団が「危機感」を認識するには、やはりリーダーの存在が必要であると考えられる（図1）。また、冒頭で指摘した通り、住民はリーダーによりその集団としての性格も決定されるといえる。だからこそ、本稿で扱った住民運動のような事象を把握する場合、リーダーの行動に着目することが重要である。

次に、本稿では特定人物が景観保護あるいは生活環境維持のため、「観光のまなざし」を取り込んでいる点を考察した。この特定人物は、あくまでも住民の立場から、観光によってもたらされる積極的な効果を狙っていた。経済効果に即つながらるような「観光」を期待していたわけではなかった。ここに生活者の主体的な生存の戦略が見られる。

この視点から見て行くと、敵と味方、あるいは地域外部者と内部者を敢えて厳密に区別しない柔軟な態度を捉えることができる。すると、一連の景観保護への関わりも、硬い抵抗の意味合いが強い「運動」としてではなく、ソフトで臨機応変な「活動」とも理解し得るだろう。

「住民」を一枚岩で描かないとするならば、リーダーのみではなく、さらに多様な人々の対応と「戦略」をも把握しなければならない。事実、彼らは自らの生活と生活環境の観光化の間で、異なる影響を受けている。そしてさらに、ライオンズマンション入居者のような新住民の参入により、町づくりに変化が見られることは大いに予測される。今後も谷中の調査・

研究を続行してこれらの課題に取り組みたい。

注

- 1 谷中1～7丁目および上野桜木1、2丁目に当たる地区。
- 2 これに関しては、国勢調査報告（平成7年）（1999、東京都台東区総務部総務課、p.9）、および東京と台東区住民台帳人口（1971～2000年）を参照されたい。
- 3 有末（1999：pp.216-222）は、東京区部のインナーシティ的状况を中林を引きながら（中林一樹、1983年10月、「大都市内部市街地に関する研究（1）―東京の都心周辺高密度市街地の現状に関する資料」『総合都市研究』第13号、東京都立大学都市研究センター、pp.113-132）、「地域社会の衰退」、「経済の停滞」、「市街地環境の衰退」、「社会病理的状况」から、インナーシティ的状况の大小を導き出している。
- 4 「土地利用の現況」p.1, p.25
- 5 本売却状況は、2001年夏の情報である。
- 6 梶田孝道、1988、pp. 36-50
- 7 谷部真吾、2000
- 8 矢島妙子、2000
- 9 竹中宏子、1999
- 10 アーリ、J. 1995、p.21
- 11 川森（1996：pp.150-158）は、伝統的な文化が、ノスタルジアを求める観光という枠組みの中で再構成されていく過程を、遠野を例に論じている。橋本（1996：pp.178-188）は、「壬生の花田植」という民俗芸能を取り上げ、観光を介して生成する民俗芸能のあり方を述べ、観光と民俗芸能の保存との相互関係を考察した。また、山下（1988：pp.157-173）は、トラジャを例にとり、観光開発とその促進により当該民族の伝統文化が彼らの文化的アイデンティティの重要な指標になっている現状を明らかにしている。ただし、この観光開発は、インドネシアという国民国家により一民族であるトラジャにもたらされたものである。
- 12 京都の左大文字における「演じる者」・「ともす者」と「見物人」・「祈る者」の動態的な相補関係を明らかにした研究（和崎：1987）、小倉祇園太鼓における「見られ

る」という他者からの視線の存在、そしてその意識化により、新たな太鼓たたきのチームの形成や発展を促すことを論じた研究（中野：2000）などである。

13 『台東区史』，2000，pp.35-36

14 『台東区史』（前掲書），p.36

15 『台東区史』（上），p.777

16 建築基準法によると、近隣商業地域には、主に、次に挙げる建物以外は建設可能である。1)客席の床面積200㎡以上の劇場や映画館など、2)風俗営業内の料理店・キャバレー・ダンスホール、3)個室付浴場、4)床面積が150㎡以上で危険性や環境悪化の恐れがややある工場、5)床面積が150㎡以上で危険性や環境悪化の恐れがある工場。

17 正確な名称は、「ライオンズガーデン谷中三崎坂」であるが、ここでは通常使用されている「ライオンズマンション」という名称を用いることにする。

18 平成8年8月現在の「土地利用現況図（建物階数別）」では、三崎坂頂上付近に中層（6～7階）の建物が一戸あるのみである。

19 谷中の生活文化を大切にしたいと考える、地元の有志と建築や都市計画の若手専門家の集まり。谷中の生活文化の調査研究およびその地元への報告、住民参加によるワークショップの開催、谷中地区での建て替え相談などを主な活動としている。谷中7丁目に寄り合い所を持つ。詳しくは、葛城(1996)の論文を参照されたい。

20 小浜は、『谷根千』を「コミュニティ・メディアのうち、広く、日常生活に関する情報を活字化した印刷メディア」（小浜，1996：p.32）であるコミュニティ・プレスと位置づけ、その活動と機能の分析・検討を行った。（小浜，1996：pp.31-45）

21 道路の境界線から5mまでは、4階以下（高さ14m）で、5m以上は、6階以下（高さ18.5m）の制限が設けられている。

22 平成11年12月8日に行われた住民大会の配布資料には、「谷中にあった建物の基本的な考え方」として、次の6点が挙げられている。1)歴史・文化に対する配慮（町の景観に溶け込むこと。長年培われてきた寺町の雰囲気・家並みを壊さない。坂の景観への配慮）、2)ヒューマンスケールを守る（居住者にも町の人にも圧迫感を与えない、親しみがもてるスケール感でなければならない。人間の生理に合ったものとする）、3)居住者の暮らしぶりが感じられる（谷中の町がホッとする一つの要素は住民の暮らしぶりが町へ伝わってくるからである。居住者の暮らしぶりが感じ

取れるつくりにすることで地域の人が安心感をもてる。閉鎖的なマンションにしない)、4)地域住民と交流をもつ(子供の教育、高齢者福祉等、地域の中で支えあいながら住むことは定住の基本であり、そのためには日ごろから地域の人々とのつきあいがスムーズにいく必要がある。特に大規模マンションの場合、地域から遊離し地域のよさにただ乗りする場合が多い。ここではぜひ地域とつきあいがあるマンションとしてほしい)、5)自然をとりこむ緑豊かな環境(谷中は空が広く緑が豊かであり、都心にあって自然と楽しめる稀有な地域である。…このマンションにおいても緑豊かなものとしてほしい)、6)自然の素材を使う(人間に一番なじみのある木や土によって谷中の町はつくられてきた。現在は法的にマンションは木造でつくることはできないが、なるべく自然の風合いがあるものを使用してほしい。…)

- 23 「谷中さんさき坂商店街振興組合」の歴史的経緯は次のようである。当組合の前身となる三栄会という商店会が、昭和30(1955)年に発足した。その後、不忍通の商店会に押されて商店街は沈滞し、同会の活動も振るわなかった。更に昭和45(1970)年以降、スーパーマーケットが近隣に進出してきた。この事態に対応すべく、昭和57(1982)年に三栄会を発展的に解消して谷中さんさき坂商店会を結成し、次いで翌58(1983)年に現在の谷中さんさき坂商店街振興組合へと改組した。(『商店名鑑』, 1995: p.112)

- 24 毎年10月14日頃行われている。

- 25 『谷根千(谷中・根岸・千駄木)』其の1, 1984

- 26 この祭りは8月1～31まで行われる。そこでは圓朝祭り実行委員会が組織され、下谷観光連盟や百貨店も後援しているので、「谷中菊祭り」に比べ規模も大きい。

- 27 A氏は更に「ただ木を植えて、普通の公園のようなものをつくるんじゃあ面白くない。そこへテントを張って何かするとか、学校と一緒に何かやれたら…」と思って提案したんだ」と言っている。現在では、「谷中菊祭り」になると当ポケットパークにテントが張られ、祭り本部になる。その横から校舎の入り口まで、学校関係者や子供たちが露店を連ねる。

- 28 元は、初音町四丁目だったことから初四町と名づけられた。

- 29 これは、あくまでA氏からの聞き取りである。交番建築に関する詳しい情報は、機密事項ということで警視庁下谷警察署では聞くことができなかった。

- 30 工事の正式名称は、「屋外職員便所新設設備工事」となっている。

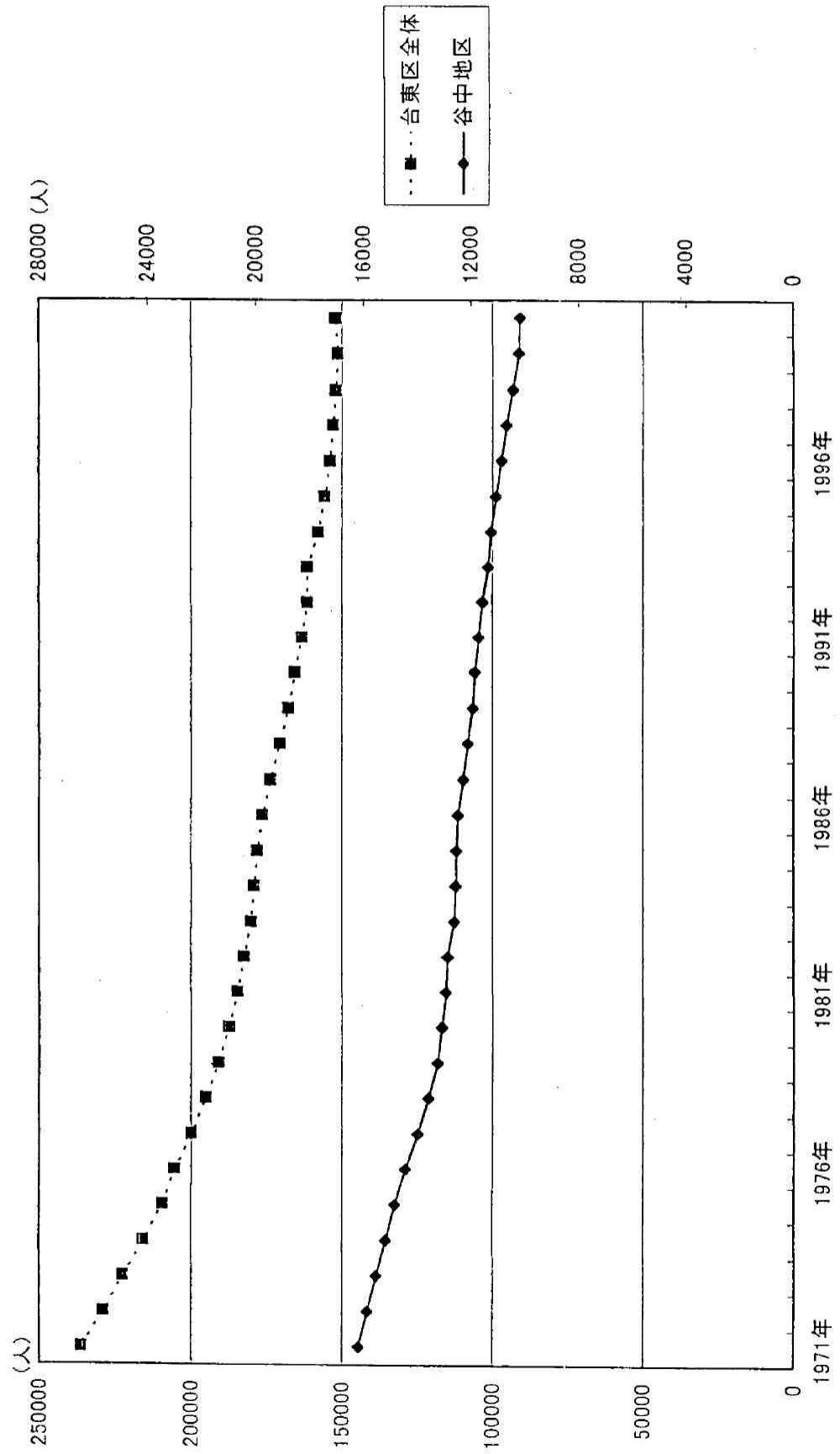
- 31 小浜ふみ子, 1994, pp.33-35
- 32 『谷中界限散策スポット』(パンフレット)
- 33 石田良介, 1984, p.7
- 34 『谷中のすまい』, 1985, (序文より)
- 35 谷中学校平成10年度案内より
- 36 ライオンズマンション入居者募集の広告より
- 37 浜 日出夫, 1999, p.14
- 38 アーリ, J. 1995, 前掲書, p.16
- 39 李光一, 1985年, p.203. なお、ここで李は、エリック・リーファアの提言を要約しながらヘクターの論を批判していることを付しておく。

(引用・参考文献)

- 有末 賢, 1999, 『現代大都市の重層構造』, ミネルヴァ書房
- 軍事貞則, 1996, 『踊れ! —「Y O S A K O Iソーラン祭り」の青春』, 文藝春秋社
- 梶田孝道, 1988, 『エスニシティと社会変動』, 有信堂
- 葛城美和子, 1996, 『まちづくりNPOの現状とまちづくりネットワークの研究—「谷中学校」の活動から—』, 東京都立大学大学院都市科学研究科(修士論文)
- 橋本和也, 1999, 『観光人類学の戦略—文化の売り方・売られ方』, 世界思想社
- 浜 日出夫, 1999, 「伝統の創造と観光のまなざし—グラオーグラマーンのパラドックス—」, 浜日出夫編『「筑波山名物がま」の油の誕生—伝統の創造と観光のまなざし—』, 筑波大学社会学類, pp.1-19
- 石田良介, 1984, 『江戸のぬくもり 谷中百景』, アドファイブ出版局
- 小浜ふみ子, 1994, 「占領下における町内会の再編過程」『年報社会学論集』第7号, 関東社会学会, pp.25-36
- , 1995, 「下町地域における町内社会の担い手層—戦前期における下谷地区を事例として—」『社会学評論』46巻2号, 日本社会学会, pp.63-77
- , 1996, 「大都市とコミュニティー—プレスが創るコミュニティー」, 小笠原浩一編『地域空洞化時代における行政とボランティア』, 中央法規出版
- 松田素二, 1999, 『抵抗する都市—ナイロビ移民の世界から』, 岩波書店

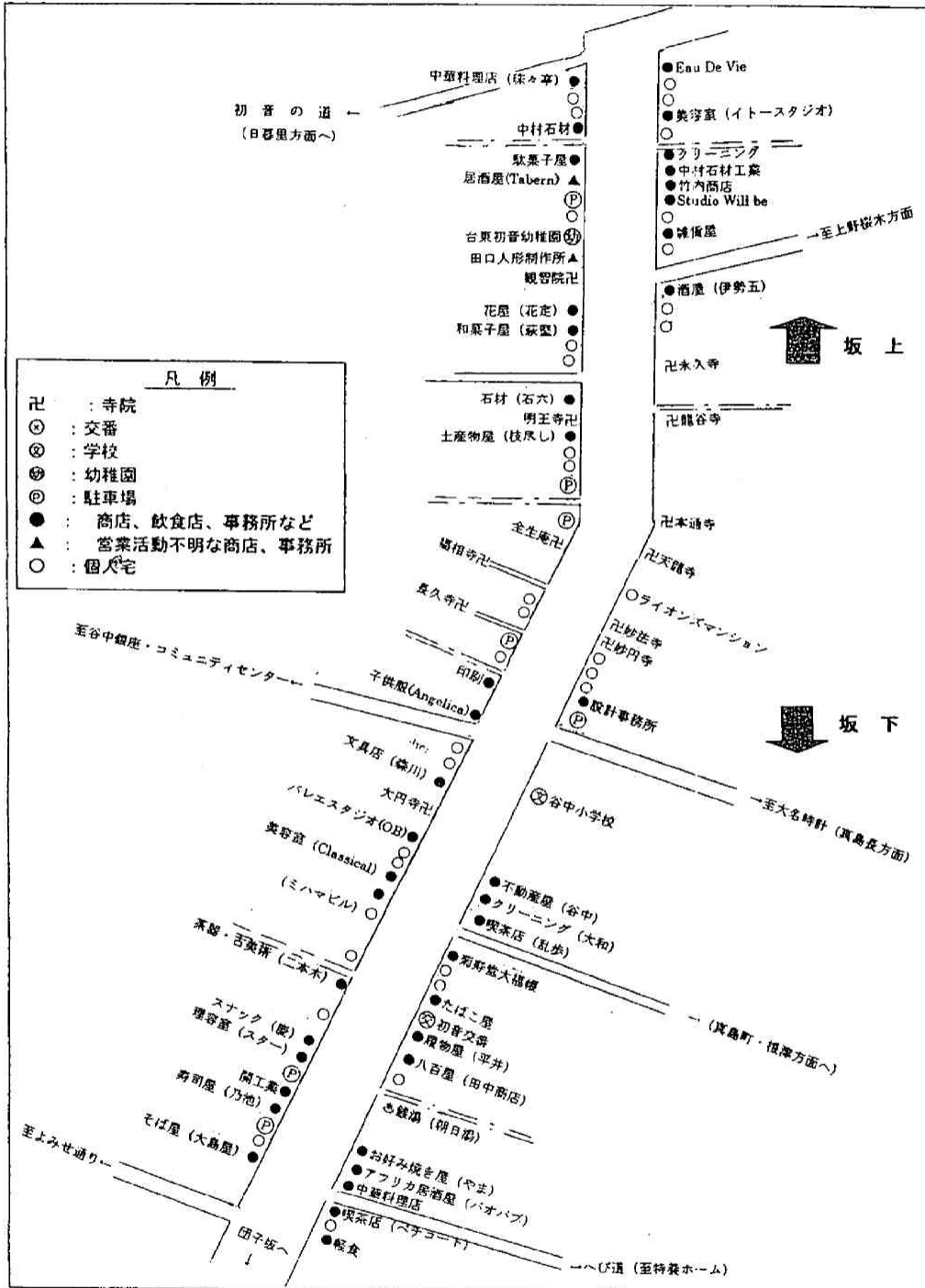
- 中野紀和, 2000, 「視線の力 —都市祭礼・小倉祇園太鼓からみた新たな紐帯」, 日本生活学会編『祝祭の100年』, ドメス出版
- 小笠原浩一編, 1996, 『地域空洞化時代における行政とボランティア』, 中央法規出版
- 李光一, 1985, 「エスニシティと現代社会 —政治社会学的アプローチの試み—」『思想』4月号, 岩波書店, pp.191-210
- 鈴木広・倉沢進編, 1984, 『都市社会学』, アカデミア出版会
- 竹中宏子, 1999, 「祝祭組織の構成原理から見た都市社会—スペイン・ウエスカのペーニャの形成と変遷—」『生活学論叢』5号, 日本生活学会, pp.15-30
- アーリ, J. 1995, 加太宏邦訳『観光のまなざし』, 法政大学出版局
- 和崎春日, 1987, 『左大文字の都市人類学』, 弘文堂
- 谷部真吾, 2000, 「見せる祭りを目指す実践の誕生—遠州『森の祭り』における花火の打ち上げをめぐる—」, 日本生活学会編『祝祭の100年』, ドメス出版, pp.61-78
- 矢島妙子, 2000, 「祭り『よさこい』の誕生—『感動』した旅人たち」『現代風俗学研究』, 現代風俗研究会東京の会, pp.27-34
- 山下晋司, 1988, 「部族・都市・国家 —民族誌研究の現在—」, 伊藤幹治・米山俊直編『文化人類学へのアプローチ』, ミネルバ書房
- 編, 1996, 『観光人類学』, 新曜社
- 『台東区史』通史編Ⅱ, 2000, 台東区史編纂専門委員会
- 『台東区史』(上), 1955, 東京都台東区役所
- 国勢調査報告書(昭和45, 50, 55, 60年、平成2, 7年度版)
- 住民基本台帳人口(1971～2000年), 東京都台東区
- 台東区都市整備部, 1997, 『土地利用の現況』(平成8年8月調査 土地利用現況図)
- 『谷中界限散策スポット』(パンフレット), 台東区
- 『谷中のすまい』, 1985, 台東区教育委員会
- 谷中学校平成10年度案内
- 『谷根千(谷中・根岸・千駄木)』其の1, 1984, 谷根千工房

グラフ1:台東区および谷中の人口推移(1971~2000年)





地図1：谷中地区の位置と範囲（枠内）



地図3：三崎坂 (調査より筆者作成)



(出所：台東区町会区域図，平成 11（1999）年，台東区役所区民部区民課）

表1：ライオンズマンション建設問題に関する経緯
 (「谷中の町を考える会」資料を基に筆者作成)

年 月 日	内 容
H10年 9月23日	建設者側からお知らせ看板の書類が台東区に提出される。
9月25日	解体工事開始
10月9日	建設者側との会合(1)…住民の要望により、建設者が説明会を開く。建設計画の説明(1)
10月14日	建設者側との会合(2)…建設計画の説明(2)
10月20日	下谷仏教会第一部会で建設反対の支援が決議される。
10月28日	「谷中の町を考える会」の発足。台東区議会と区長に「計画見直し陳情書」を提出することに決定。署名活動の開始。
11月6日	谷中地区町会連合会で陳情署名に協力を決議
11月9日	建設者側との会合(3)…解体協定の説明。住民側から要望案および問題点を書面にて提出。
11月10日	台東区議会産業建設委員会において「計画見直し陳情書」が趣旨採択される。
11月11日	建設者側より建築確認の申請書が台東区へ提出される。
11月16日	合意のないまま建築確認の申請書が提出されたことに対する台東区への異議の申し立てを行う。
11月26日	建設者側との会合(4)…「谷中にあったライオンズマンションの提案」を提出。解体工事協定書の締結。
11月27日	谷中・上野桜木のまちづくりの集会開催—合法的にうちかつ地域性の論理—
11月30日	ライオンズマンション台東谷中新築工事と谷中の町を考える会のホームページを始める。
12月2日	建設者側の社長・東東京支店長に要望書を渡す。
12月3日	計画の高さに実際にバルーンを揚げ、住民に実感してもらう。
12月3日	建設者側の社長、支店長が現場を視察。
12月4日	計画の高さに実際にバルーンを揚げ、住民に実感してもらう。
12月7日	建設者側との会合(5)…建設者側は計画の確認申請を取り下げ、計画の見直しを希望。(計画の見直しに合意)
12月8日	第一回住民大会開催
H11年 2月3日	建設者側との会合(6)…変更案の提出
2月13日	三崎坂建設協定会議(1)
2月24日	合同検討会議(1)…提出案の検討
3月16日	合同検討会議(2)…提出案の検討
3月27日	合同検討会議(3)…提出案の検討
4月6日	建設者側との会合(7)…第3案(入り口4階、奥6階建て)が承認される
4月28日	「谷中の町を考える会」で、建物のボリュームが承認される。
4月28日	合同検討会議(2-1)…4月6日に承認されたボリュームに対する意匠や機能の内容を検討
5月14日	合同検討会議(2-2) 4月6日に承認されたボリュームに対する意匠や機能の内容を検討
6月22日	合同検討会議(2-3) 4月6日に承認されたボリュームに対する意匠や機能の内容を検討
7月23日	建設者側との会合(8)…6月22日の提案に対する建設者側の回答。双方が納得の上、8月中に建築確認申請を提出することが決定。
H13年 5月18日	入居者へのアンケート

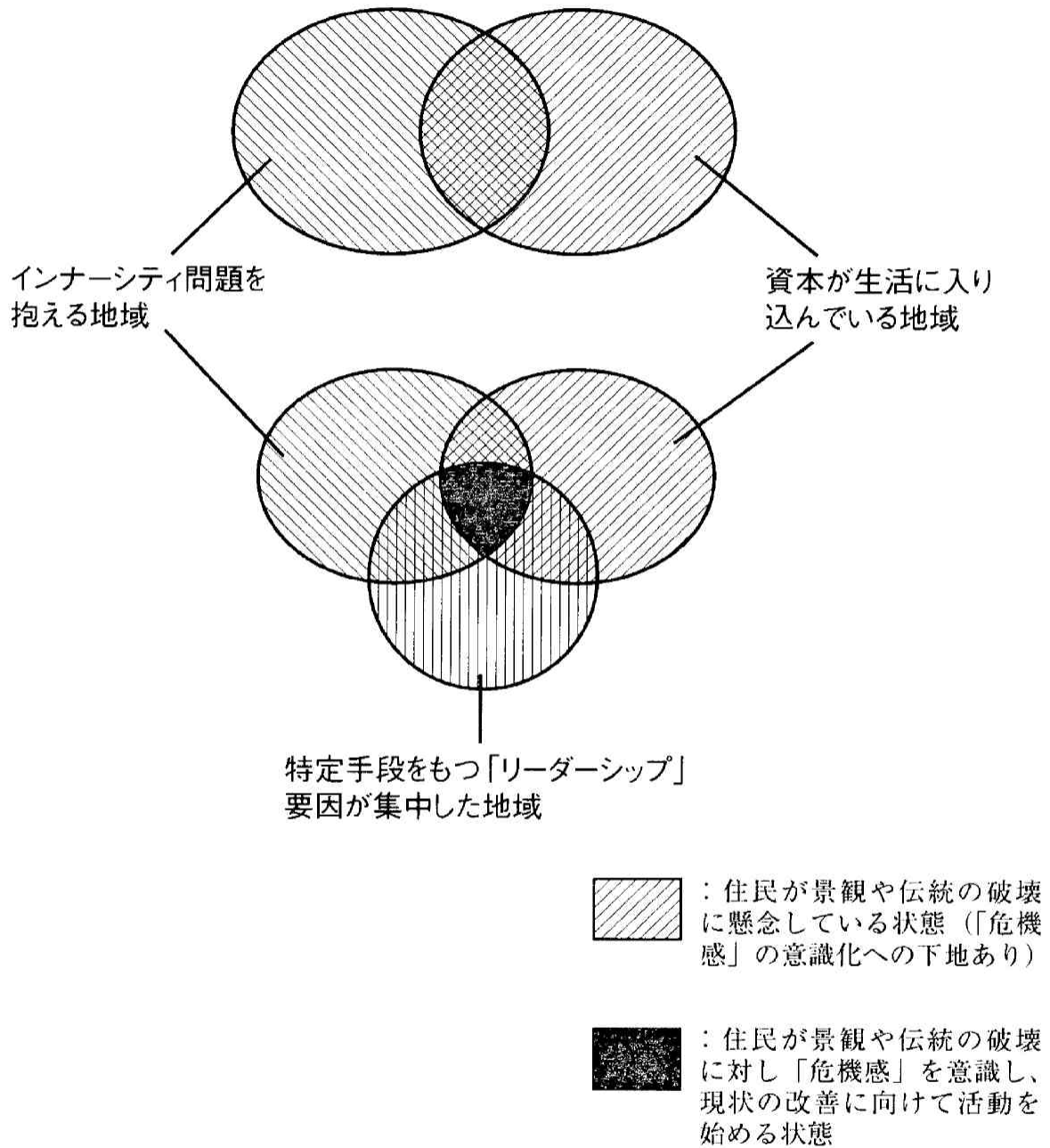


図1：地域の現状、「危機意識」とリーダーの存在

（李光一：1985を参考に筆者作成）